

岩村く佐藤一斎

― 歴史を訪ねる旅 (1) ―



下土橋 渡

西郷隆盛が私淑した人といえ、藤田東湖(常陸国水戸)や橋本左内(越前国福井)、横井小楠(肥後国熊本)の名があげられますが、会ったことはなかったものの、佐藤一斎(美濃国岩村)にも深く傾倒したといわれます。

西郷は、島津久光によって沖永良部島に流罪となり幽閉されますが、その時、持参した佐藤一斎の著書『言志四録』を繰り返し、繰り返し読み、一一三三箇条ある格言の中から特に感動した 一〇一箇条を選んで書き写し、自分だけの『言志四録』(南洲手抄言志録 一〇一箇条)をつくって人生のいましめにしま

した。西南の役において城山で自刃するまで、橋本左内の手紙とともに、この南洲手抄言志録一〇一箇条を肌身離さず身につけていたといわれます。

二〇一四年二月、岐阜県恵那市岩村町を訪ねました。岐阜県の南東端部の、愛知県・長野県ともにもうすぐの所にあります。八〇〇余年の歴史を持つ岩村藩三万石の旧城下町として、日本三大山城の一つといわれた岩村城跡をはじめ、重要伝統的建造物群保存地区に選定された商家の町並みや数多くの旧跡を有する、情緒あふれる史跡観光の町です。そして、佐藤一斎の故郷であり、岩村城址公園には一斎の座像と顕彰碑が建てられています。

佐藤一斎(さとういつさい)。一七七一―一八五九年。江戸時代後期の儒者。美濃(現在の岐阜県)の岩村藩家老・佐藤文永の子として江戸藩邸内で生まれます。早くから読書を好



国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている岩村の町並み



岩村城址公園にある佐藤一斎翁座像（平成14年10月完成）

み、書をよくし、藩主・松平乗蒞（のりもり）の子の林述斎（じゅっさい）とともに学びました。林家の塾頭をへて、昌平黌（しょうへいこう）教授となり、述斎が没すると昌平黌を統括する儒官（いわば現代の東京大学総長に当たる職）を命じられ、広く崇められました。門下生は、三〇〇〇人といわれ、山田方谷、佐久間象山、渡辺崋山、横井小楠など、いずれも幕末に活躍した人材を弟子として輩出しています。

一齋が四〇代から八〇代にかけて著した『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志叢録』（てつろく）を総称して『言志四録』と云い、『人生いかに生きるか』の視点から生き方の原理原則が説かれ、修養処世の書として古くから愛読されています。特に、明治維新で活躍した人たちに大きな影響を与えました。

岩村の古い町並みを歩けば、各家庭の軒下

には、『言志四録』を刻んだ木板が掛けられています。その数は、約二〇〇に及ぶそうです。木板の左下には数字がふってあって、『名言録集』の数字と対応させてその解説を読むことができますようになっていきます。印象に残った格言をいくつかあげてみましょう。

少而学。則壯而為有。

壯而学。則老而不衰。

老而学。則死而不朽。

少にして学べば、則（すなわ）ち壯にして為すこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。（若くして学べば、壯年になって世のため人のために役に立つことができる。壯年になって学べば、歳をとっても衰えない。歳をとり老いて学べば、死んでもその精神は朽ちることな

く、業績や名前として永遠に残る。(言志晩録
六〇条)

以春風接人。
以秋霜自肅。

春風を以つて人に接し、秋霜を以つて自ら
つつしむ。(人にはさわやかで温かい春風のよ
うに接し、己には秋の霜の寒い、身の引き締
まるような凜とした厳しさで向き合い、自分
を慎みなさい。(言志後録三三二条)

寒暑榮枯。天地之呼吸也。
苦楽榮辱。人生之呼吸也。

寒暑・榮枯は天地の呼吸なり。苦楽・榮辱
は人生の呼吸なり。(寒かったり暑かったり、
草木が茂ったり枯れたりするのは天地が行う

呼吸である。同じように、人の苦しみや楽し
み、榮譽や屈辱は人生の呼吸である。呼吸す
るのは 生きているからであり、人生良いと
きもあり悪いときもある。(言志叢録八七条)

提一燈。

行暗夜。

勿憂暗夜。

只頼一燈。

一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂(うれ
うる)こと勿(なか)れ。ただ、一燈を頼め。
(一個の提灯をさげていれば、夜の道も暗い
闇も怖がることはない。自分の足下を照らす
その明りを頼りに進めば良い。自分自身の生
き方を信じて進めば、どんな時代や環境にお
いても惑うことがない。(言志晩録一三二条)

(元九州職業能力開発大学教授)